

---

# 新雪に刻む足跡

灯夜

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

新雪に刻む足跡

### 【Nコード】

N5178D

### 【作者名】

灯夜

### 【あらすじ】

昔、近所に住んでいた『お姉さん』。大学への進学後に疎遠になっていたけど、ある日の駅前での再会してしまう。幼かったほのかな恋心と、変化していった片思い。それでもまだ気持ちは変わらないけど、時間の差は広く二人を別けていた。

「こんにちは」

そう、三年分大人になっていたその人は、穏やかな笑顔で僕に告げた。

「ごくごく普通の……当たり前さわりのない一言だけど、通り抜けていく声の音以外の意味を、まだ理解出来ずにいる。」

最初は似た人かもしれないと誤魔化して、ドキドキしながらもまだ落ち着いていられたけど、聞こえてきた声が、僕を知っているというその表情が、まとう雰囲気、はつきりと僕に理解させてしまった。

浅く積もった新雪に光が煌く昼下がりで、風は乾燥していて冷たくて、立ち止まった最後の一步はとても柔らかかった。雪を被った小さな木造の駅舎を背景に、通り過ぎていく電車を聞きながら「寒いね」と、何も言えずに固まっていた僕に、更なる言葉をくれる。

その人影を、あの人とはつきり認識した瞬間に全身を支配した強い感情の混乱と極度の緊張は、重なったままの視線の中、深い色の瞳に吸い込まれ、やっと僕は皮肉っぽい笑みで「今日は暖かいほうだよ」と、強がる。

僕の答えるのを聞いてから、志帆さんは僕の右に並んで、そうして僕も歩き始めた。

ふわりとした香水の香りに、変わらない深い漆黒の髪、ショートカットから覗く赤くなり始めてしまっている耳、揺れるイヤリングは光を瞬かせ、薄く引かれたルージューに心乱される。

「急にどうしたのさ、志帆さん」

「さんって、何よ」

志帆さんは、目を細めて苦笑いを浮かべた。

「うん、いや、なんか……」

この感覚を上手くは説明出来なくて、言い淀む。

「この前までは、志帆ちゃん、志帆お姉ちゃん、だったのにな」  
あまりに楽しそうに笑うのが面白くなって「もう、子供じゃない」と、視線を外して呟いた。

けれど、そのニヤニヤ笑いはそのまま「変わってないなあ、そういう所」と、返されてしまう。

「変わった所の方が多いよ。声変わりもして、背も伸びた、言葉遣いに」

少しだけムツとして並べていく言葉は、そつと唇に伸ばされた指先に遮られる。

「そういう意味で言ったんじゃないよ」

かすかな笑みを残したまま、それでも遠く寂しそうに、志保さんはそう言った。

その顔はずるい、僕はそれに答えるすべをまだ持っていないから。同い年のクラスの女子なんかじゃ絶対に出来ない大人の顔、この顔を見るのは二度目。昔、遠く離れてしまう前に、彼女を困らせてしまった僕に向けられた表情。だぶって見える過去。僕はもう子供じゃない、それでもまだ大人じゃなくて、沈黙だけが唯一の返答だった。

「悪い事じゃないよ」

ほんの少し暖かくなった声で、彼女はそう言った。

その頃の記憶は、断片化されていて上手く整合性のあるストーリーが組み立てられない。最古の記憶の中でも『お姉ちゃん』だった志保さんは、世界の中心といっても過言ではなかったと思う。僕も志保さんも、両親は共働きで家に居る事が少なくて、中心市街から大きく離れている自宅付近にはクラスメイトは住んでいなくて、二人で過ごした時間は長く、だけどそれはいつでも足りない気がしていた。

近くて遠い、憧れがゆっくりと恋心に変わっていく。

だから、彼女が遠い大学へと進学すると聞いた時の不安は深く、胸は締め付けられるように痛み、世界の音も色も、不安定に揺れている様にさえ感じていた。

あの頃は、幼かった。

離れていくあの人に、自分の想いを伝えられてしまう程に……。

それが、彼女の足を遠のかせるとも気付かずに。

「長くいられるの？」

「年が明けるまでかな」

柔らかな雪は音を吸い、足音も聞こえないとても静かな世界で、志保さんと交わす会話は、どこか現実感を無くさせる。その声は沓え渡り澄んだ空気に凜と響き、白く染められた、駅の少し先にあるバス停までの道が、初めて見る景色の様にさえ感じた。

「すごく、短いね」

「ぼちぼち就職も始めないとね。卒業までは一年以上もあるのに、もう就職活動なんてうんざりすると思わない？ 大体、企業の方も焦りすぎてるのよ」

志保さんの話す、大学の事、就職活動の事、多分まだ言葉以上には理解していない。

せめて、もう少し年が近ければなと、思ってしまう。

まだ僕の知りえない多くの事を志保さんは経験してきたのだろう、三年は同じ様に過ぎて、距離は縮んでないのだから。

「三年なんて、あっという間だったのになあ」

そう呟いたのは、残念そうに、でも楽しさの見える表情。

「そうかな？」

つられるように、皮肉めいた笑みを浮かべる僕。

「まだ、シラバスと睨めっこしてた一年の、そのままの気分だもん」  
一歩踏み出して、くるりと振り返り、無邪気に顔を綻ばせる志保さん。

その顔を、とても綺麗だと思った。

彼女が、嬉しい顔をして、寂しそうな顔をして、多分どんな顔の時でも、やっぱり僕は少しだけ悲しくなる。

視線が重なって、少し見詰め合ってから、先に志保さんが背を向けてバス停へと歩き出した。

僕は、昔と同じように、その斜め後ろを付いて行く。

ならんだ背中では、もう僕の目線の下なのに、他の全ての距離が変わってはいなかった……むしろ自覚してしまった今は、遠くさえ感じてしまう。

時刻表を見ると、バスには、まだ十分ほど時間がある。

終業式だけど世間はまだ平日で交通量は少なく、晴天なのに驚くほど冷たい風に、人通りはほとんど無かった。ぎりぎり屋根と風防のあるバス停は、それでもまだまだ痛むくらいに寒かった。

隣を見れば、志保さんは、手袋を外して赤い耳を指で温めている。その体を縮めて耳を温めたり、今度はその掌に息を吹きかける仕草がどこか子供っぽくて、自然と笑みがこぼれた。

「何よう？」

少しかがんでいる彼女は、上目遣いに視線で非難してくる。

白い息は僕に届く前に、空へと消えて行った。

「別に……しもやけにならないといいね」

ゆるんだままの頬でそう答えると、少しだけ拗ねた志保さんに、ツンと、人差し指で額を弾かれてしまう。

それが、どこかくすぐったくて、楽しかった。

「手、怪我してる？」

ふと、手袋をはずした右手首のテーピングが目に入った。

「ん？ ああ、これ？ 痛めたとかじゃないのだけど、弓道やっててちよっとね」

嬉しそうに袖をちよつと上げて、きれいに巻かれたテーピングを見せてくる。

「昔、そういうのしてたっけ？」

高校では部活に入っていないかったし、中学では文学部だったから、弓道と聞くと結構違和感があったので、僕はそう聞いてみた。

「うん、大学に行つて始めたの。やってみると、私に合つてて、いつのまにかのめり込んだ」

無邪気に話すその顔は、昔の……今の僕より幼い頃の彼女を見ているようで、微笑ましかつたけど、そうやって新しい何かを見つけている事が、僕だけが置いて行かれているようで嫌でもあった。

「的に射る時の張り詰めた空気なんて、ぴったりじゃない？」

そう言つて、弓を引く真似をする志保さん。

それにぼんやりと答えながら、やっぱり三年長いなと感じていた。

新しい何かが見付かるほどなんだから。

バス停でぼんやりとしている僕達の前の路を、長いコートに包まれた二人の男女がゆっくりと歩いていった。同じ学生服、恋人同士だろうか？

その背中を、なんとなく無口になりながら見送る。

そうして、その二人が視界の隅から消えた後、緩やかな沈黙を破つて「そういえば、昔さ」と、志保さんは話し出した。

その始まりに、心臓がひとつ大きく跳ねる。

「引つ越すする前？」

言葉が震えないように、ゆっくりとそう聞き返す。

「うん」

頬を掻きながら、若干決まりが悪そうに目を逸らす志保さん。

不安と期待……というよりは、不安の方が大きくて、気ばかりが逸る。

「向こうに行く前の日に家に来た時、やけに思い詰めた顔して好き

だつて言つてたじゃない」

笑顔で話す志保さんとは裏腹に、自分の心が暗く深く沈んでいくのが分かった。

ああ、もう、この人にとっては終わってしまった事なんだな、なんて、分かっていたのに、そういう事態は予想の範囲内なのに、また帰って来られたのはそういう意味なのに、それでも僕は、その事がひどくショックだった。

いつか思い出になるとは分かつてはいても、それはまだ今じゃない、間に合うんだと、いつでも自分を誤魔化していた気がする。

あの三月の二人で歩いた最後の日に、明確な拒絶も了承も無かつたのを、僕は別の意味に捉えていたのかもしれない。

二人が並べるいつかの日までの、保留懸案だと。

「あの時は、驚いたなあ」

遠い昔を懐かしむように、目を細めて、そう言つてから「ほんきだった？」と、軽やかな笑顔で、小首を傾げ、顔を覗き込んでくる志保さん。

風が吹いていた。

冷たく乾いた風が、あの日と変わらず二人の間に。

「まだ、変わっていないよ」

躊躇いはあつた。

けど、暗く高く響いた鼓動に押し出されるように、言葉が溢れた。唇が乾いて行くのを感じた、吸い込んだ冷たい空気が肺を突き刺し、これから言おうとしている言葉の意味に……微かに震える。

「色褪せずに、そんな風に思い出にならずに……。僕が変わるのと同じように、方向性や意味合いは変わって行ったのかもしれないけど、根本的な気持ちはずっとそのまま」

言い終えた僕には、その深い瞳を見つめることしか出来なかった。行動に移せるだけの、何かが欠けていた。

過ぎていく一秒一秒の鼓動がとても緩やかで、呼吸に合わせて上下する彼女の肩、風になびく髪の一筋、流れていく白い吐息、そして風に舞う風花の煌きさえはつきりと視界の片隅に捉えていた。

長い一瞬の後、ふっと志保さんの口元に微かな笑みが浮かんだ。

「強いなあ……強くなっちゃったんだなあ」

くしやりと笑って、そう告げる志保さん。

その視線がさっきまでと同じ事を、僕は無視出来ずに「酷い台詞」と、苦しく歪む心を、無理に笑顔に強制して言った。

「強くさせたのは、間違いなく志帆さんだよ。帰り際に一度も振り返らなかった背中が、いつだって先に離された掌が、一度も約束出来なかった『またね』が……追いつけない僕は、待っただけだったから、走らなくちゃいけなかったんだ」

強い気持ちとは裏腹に、自分でも驚くほどしっかりとした言葉が溢れる。

行き場無く押し止められていた想いも、成長しているのだと強く感じた。

「大学は」

「別の所だよ、志保さんとは」

言葉を遮って、僕は答える。

「受ければ、だけどね」

と、少しの気恥ずかしさを隠さずに付け足して。

「そっか」

そう答える志保さんの優しい表情が、柔らかい言葉が、心の琴線に触れる。

その穏やかさが、強さなのだと初めて気付いた。

「本気だからね。影を追うだけじゃ嫌なんだ」

その空気に触れ、冷たく張り詰めていた空気が僅かに緩み、ようやく僕も穏やかな笑みを浮かべる。

「保証は無いから待ってて、なんて言わないけど……頑張るよ。同じ場所から、同じものが見えるように」

それからちよつとだけ舌を出して「次の告白こそ成功するように」と、付け加えた。

志保さんからは、ただ微笑が返って来るだけ。

でも、それが一番良い。

まだ、確かな二人を思い描く事なんて出来ないから。

でも、それは新雪に刻んだ一歩。

次々と降り積もる雪に隠され、春には消えてしまう。

だから、駆け出さないといけなかった。

何より遠い、時間に置いて行かれないように。

(後書き)

いかがでしたでしょうか？

作中に終業式とありますが、実はこの作品、十二月の終わりに投稿予定で書いていたものが、ずるずると延びてしまったのです。

最近は、大学院での活動が……！

これからも頻度は落ちますが書き続けますので、お気づきの点や、感想など、宜しくお願いいたします。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5178d/>

---

新雪に刻む足跡

2008年11月7日08時14分発行